

雪崩れ

現今の物語ではない。明治——それもやうやく十何年かの春の初めの頃と思ひ給へ。

長い冬中降りこめた雪が、真白に積固まってまだ解けもやらない山国の山々にも、春が来れば春の日影が射した。雪の中からすつと伸ばした裸木の枝の端々には、何時か、油絵具を篩ひ落したやうな緑の木の芽が山に住む人々に冬の終りを告げがほに萌してゐた。

暖かな日が三日続いて、山々に積んだ雪も少しづつ、解け始めた。と、また今年の雪の終りか、羽のような淡雪が降る日が来た。

奥深い山の中の一軒屋、壮吉父子の家の戸口にも明るい春の雪片が乱れ落ちた。

「莊吉、また降りだしたな。」

父親は、重たい雪沓を足に穿きながら、囲炉裡の縁に蹲まる莊吉に声をかけた。

「え、生憎だね、お父っあん。これでもやっぱりお父っあん出掛けるかね。」

「あ、行くとしやうよ。暫く行かなかつたから、問屋でも待

ちかねてるだらう。」

父親は事もなげに言つて、土間に立上つた。

莊吉は雉子や山鳥や山鶴などの獲物が一ぱい入つた網袋を棚から下して父親に手渡した。

「お父っあん。重いね、今日は。」

「ハハハ、暫く行かなかつたから、獲物も溜つた。どら、行つて行けるかな。莊吉、帰りはやっぱり明日になるから、今夜は氣を付けて留守をするのだよ。明日あたり天氣が晴れると、もう山の雪が解け出す頃だ。きつと方々で雪崩が始まるぞ。氣を付けるのだよ。帰りにはまた甘いものでも買つてくるからな。」

やがて父親は、獲物の網袋を重さうに肩に掛けると、淡雪の戸口を出て行つた。

父と二人きりで山の中の一軒屋に住む莊吉は、獵師を生業としてゐる父親が、溜つた獲物を町の間屋に卸しに行く度、山を下る毎に、たつた独りで淋しい家の留守をしなければならなかつた。昼間さへ減多に人も通らない深い山の中であつたけれども、慣れた莊吉にはたつた独りで留守するのもそんなに淋しい事でもなかつた。

今日もかうして莊吉は囲炉裡の縁に独りぼちになつた。莊吉は藁を持出して父の雪沓を作つたり、鉄砲の手入れをしたりして相手のない時を過した。

やがて、行燈を灯して晩飯を済ますと、別にする事も無くなつて、囲炉裡へ薪を焚きつきながら、古い絵本などを取出して

眠くなる時刻を待った。

雪の夜の山中は、咳一つの物音もなく、静かに静かに更けて行った。

小さな欠伸を一つすると、莊吉はやがて寝る仕度に掛った。と、其時、戸口の外に雪を払ふやうな気配がすると思ふと、がらりと大戸が開いて雪まみれの男の姿が入って来た。

「お父っあんか？」

莊吉は吃驚して立上った。暗い行燈の灯にすかして見ると、合羽に積った雪を敲き落して、凝つと此方を睨んだ人の顔は、父親には似てもつかぬ顔であつた。

「……………」

莊吉はハツとして立竦んだ。

「お前一人か？」

戸口の男は咎めるやうに声を掛けた。

「え、独りだ。あんたは？」

「さうか、俺は旅の者だ。この雪に宿を取損ねて困つてみると、この灯を見つけて突然に飛込んで来たが、驚かして済まなかつた。」

莊吉は、戸口の男が寒さに震へてゐるらしい様子を見ると、気の毒になつて、囲炉裡の傍へ男を上げた。

「忝けない。」と、男の人は嬉しさうに火の上に両手を翳して莊吉の顔を凝と見た。

莊吉はどん／＼薪をくべたした。囲炉裡の火は、やがて旅人の顔を真赤に照しだした。

「お客さん。」

暫くの間無言でゐた莊吉はかう旅人を呼んだ。

「お客さん、腹が空いてるかね。」

「あ、何か食べ物があつたら、何でもい、食はして貰へるかね。」

「飯なら炊くばかりだ。」

「さうか、それは気の毒だな。」

「何、わけないよ。」

莊吉は快く、朝飯の仕度をした鍋を囲炉裡の上に掛けた。

やがて鍋の中の米がふつ／＼と煮立つ頃になると、莊吉も心置きなく旅人と口をきくやうになつた。旅人の話では明日は早く山を越して隣村へ下りたいといふ事だつた。

莊吉の炊いた飯を食ふやうに食べ終ると、

「あ、甘かつた。有難い。」と、ほつとしたやうに旅人は息をついた。そして囲炉裡の灰の中へぼたぼた涙をこぼした。

莊吉は驚いて客の顔を仰いだ。

「ハハハ……あまり有難くて涙を落した。俺は明日の朝あんたと別れ、ばもう一生の中二度と会ふ事はないかも知れぬが、今夜あんたに親切にされた事は俺は死ぬ迄忘れんだらう。あんたも早く出世して偉い者に、なんなさい。」

「え、お客さん、もう床を取りませうか、お父っあんの床だけれど。」と、莊吉は客に訊ねた。

「いや、俺はこゝで結構だ。もう少し囲炉裡で温まろう。あんた眠いだらうから眠みなさい。俺が朝まで大丈夫番して上げや

う。」

言はれるまゝに莊吉は客を残して先に眠ってしまった。そして翌朝早く眼覚めた時には、客は囲炉裡の前へ横になつたまま、軽い躰を立てゝゐた。

莊吉は急いで朝飯を焚き出した。そして粗末な朝飯の用意が出来てから客を揺起すと、客は驚いたやうに起上つた。何故か客は大変慌てゝゐる様子だつた。莊吉は客の食べた朝飯の残りゝで温かな握飯を作つて弁当と思つて客にすゝめると、客は喜んでそれを腰に付けながら、莊吉に詳しい道を訊いて、消えるやうに戸口から去つて行つた。

降積んだ暁の雪の中を、歩きにくさうに遠ざかつて行つた旅人は、戸口に立つ莊吉を峠の曲り目から、一度残り惜しさうに振返つた。

「左様なら！」

思はず声高く呼んで莊吉は片手を高く挙げた。

「左様なら！」と、向ふでも力の籠つた声で応へると其俣黒い合羽の姿は雪の峠に隠れてしまつた、独りになつた莊吉は、急に淋しくなつた。別れ、ばもう会へまいといった旅人の昨夜の言葉が堪らなく懐かしく身裡に蘇生つてきた。

雪の晴れた空にはやがて朝日が昇つて暖かな春の日和になつた。莊吉の家の圍りには雪が解ける水の音が唄のやうに聞えだした。時々大きな雪崩の音も遠い山の方に聞えたりした。

午頃になると、町へ下つた父親が歸つて来た。莊吉が飛出して行つて見ると父親の後には見慣れぬ人が三、四人、役人見た

いな姿でついてゐた。

父親は家に入るなり一人の旅人の姿を見掛けなかつたかと莊吉に訊ねるのだつた。同行の役人見たいな人も、父の言葉を補つて詳しくその旅人の様子を知らした。それは紛れもなく、昨夜泊めた旅人に相違なかつた。

莊吉は、今朝迄の事をありのまゝに話して、旅人が立去つた方角を指さした。

役人見たいな人達は如何にも愕いたやうだつたが直様、尋ねる旅人の跡を追ふ事になつて、父親も莊吉も道案内ながら一緒に家を出た。

道々の話で、昨夜の旅人は重い国事犯で、父に同行して来た人達は、その捕縛に向ふ政府の役人である事が解つた。莊吉は愕きもしたが、また何ともいへない心持に打たれた。何故か昨夜の旅人が氣の毒な氣がした。そして黙つて父親の後から従いて行つた。

間もなく、昨夜の旅人の姿を莊吉達は発見した。然しそれは、谷間の雪崩の下に埋れて、息の絶えた無惨な姿であつた。雪に埋れたため傷一つ受けず、安らかな顔で旅人は死んでゐた。

「や、握飯がある。」と、旅人の身体を検べてゐた役人の一人は、傍の雪の中から掘出した二つの握飯を取上げた。雪に埋れてゐた握飯は、まだ温かさうに湯気をたてゝゐた。

莊吉は何とも解らない涙を雪の上に落した。

(大正10年)